

中央こども病院サービス向上プロジェクト（国際協力機構 JICA）

大阪赤十字病院 国際医療救援部 看護師 池田載子

派遣期間 2024年2月3日～3月21日

シエラレオネ共和国にて、国内唯一の小児専門病院であるオラ・デュリング小児専門病院（以下 ODCH）の医療サービスの質の向上のため、短期専門家として支援活動をおこないました。前回に引き続き、看護師の勤怠状況の向上や、患者安全の向上、看護の質の向上を目標に活動しました。

今年の4月に開院予定の新病院ですが、病院建設や医療機器の納入は無事に3月末までに終了しそうです。しかし、新病院はJICA側が建設、準備するものと、シエラレオネ保健省が準備するものの二つに大きく分けられます。保健省は新病院の霊安室や倉庫、病院周囲の塀やセキュリティゲートなどを設置する必要がありますが、ほとんど進んでいません。

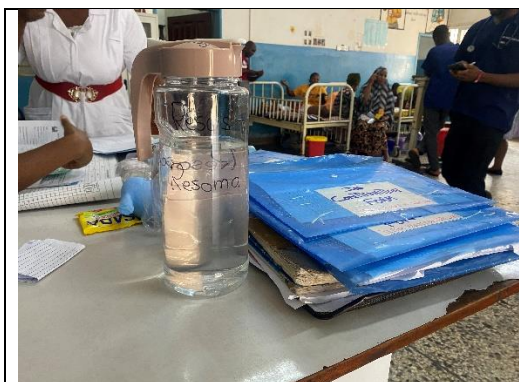
本来であれば、今回の派遣の主たる目的は、新たに新病院に設立される小児外科病棟で働く看護師に、小児外科トレーニングを実施するということでした。シエラレオネでは、ガーゼや胸腔ドレーンなどの資機材や資料は非常に入手しにくく、特に小児用となるとさらに困難です。研修用に日本で調達して持参したのですが、トレーニングは次回に持ち越しになりました。

研修が出来ない代わりに、看護のOJT（On the Job Training: 実地研修）を中心に活動を行いました。病棟の体温や脈拍などのバイタルサインの測定や、看護記録の記載など基礎的看護が出来ていないことも多いため、前回の派遣から基礎的な看護に関して、週に2回病棟ラウンド行き、スタッフや師長に、その都度フィードバックを返すとともに、毎月レポートを作成し、病棟看護師に自病棟と他病棟とを比較し、自病棟の看護の質を意識してもらえるようにしました。効果は徐々に表れ、どの病棟も少しずつ改善してきており、ICUなどの重症患者を診る病棟では、次のステップに進めるくらいになってきました。さらに、短期専門家である私が帰国している間も、病棟ラウンドやそのデータ入力が続けられていたことに、驚くと共にとても嬉しく感じました。

技術移転などの事業では、専門家や指導者がいる間は良いが、そのあと元の状態に戻ってしまうということがよくあります。この事業でも、日本に帰国し再度シエラレオネに行くたびに、元に戻っていることが多々ありました。それを繰り返しながら、どうやったらよい看護が定着するのか試行錯誤したり、本当に活動内容は現地のニーズに合っているのか？など原点に戻って考えたりします。現地の看護師と患者家族のニーズ、そして援助側が考えるニーズがぴったり一致すると、何も大きな工夫や働きかけをしなくても定着していきます。その良い例が今回の派遣でありました。

シエラレオネでは栄養状態が悪い上に、脱水の子どもが多く、ショックを起こして亡くなることも稀ではありません。経口補水液を子どもに飲ませるのですが、低栄養の子ども

には通常の経口補水液 (Oral Rehydration Solution) ではなく、Resomal という栄養失調の子どもへの投与に適した経口補水液を飲ませます。これまでは患者家族が栄養失調専門病棟に行ってもらってきて飲ませていました。しかし、3~4 時間以上たってから飲ませたりと、タイムリーに脱水治療が出来ず、状態が悪化し死亡したケースがありました。そこで、大きな水筒を購入し、Resomal 溶解液を救急外来に設置しました。新しいことを始める場合、何度も看護師に説明し、実際に私たちが一緒に作成したりして初めて継続されることが多いのですが、たった 1 度説明し、物品を準備しただけで継続しています。家族も看護師も脱水に素早く対応できるようになりました。こんなことはめったにありません。すべての活動がこのような感じで進めば良いですが、そうもいかないのが難しい所です。次の派遣の際に、この Resomal 溶解液がきちんと設置されているのか、楽しみにしたいと思います。



救急外来に設置した Resomal 溶解液



新病院では、医療機器の引き渡しと、説明が行われています。